

「フムあれは皆嘘や」

「嘘か……併し早速にあないにうまい事を言へたなあ」

「大阪で噺を聞きに行たら噺家が彼んな事を言ひ依つたんや」

「そんなら噺家に聞いたんか、噺も聞きに行かんならんな、噺家は命の恩人や、噺を聞いたら爲になる、大阪へ歸つたら噺家をヒイキにして遣ろう」

と二人は急ぎ足で家なら十軒も行った時に後から

「これ〜大阪の衆、これ大阪の衆……」

「オイ清やん後から呼んでるで」

「ハイ何ぞ用かな」

「お前さん達も大阪へ歸つたら私等を見習ふてど運附になりなされや」

「エ、ツ、阿呆言へ俺等はど運附は嫌ひぢやわい」

「ア、産れ附きの貧乏性は仕方がないナ」

## 其の面影

### (四) 西國坊明學

笑 福 亭 福 圓

浪華落語界の盛衰を語るのには是非西國坊明學を忘れてはならぬと思ひます。餘り遠い昔でもありませんが、年輩の諸氏はアノ盲目の大人道で愛嬌ある舞臺姿や、琵琶軍談で平家物語や、横笛の曲吹き、淨瑠璃引語りのごむく、即席都々逸で右手を大きく開いての身振り得意のスイリヨ節や、眞似手のない十八人藝等の多藝と共に定めし思ひ起されることゝ存じます。

私が親達に連れられて淡路町の幾代亭などへ聴きに行つた頃から何となく親しみのある高座振りで、子供心に

も好感を持つてゐました。私が鹿仲間へ入つて知つたのは明學師の晩年で、幸か不幸か同師の最終の巡業に一座して北國を一巡りして新潟で終り、これが死別に成るとは知らず故郷博多へ見送つたのでした。御承知の如く明學さんは鹿仲間存在されたとは云ひ條、落語家ではなく、今で云ふ色もので變り種でありました。素噺だけではなく踊や音曲と云つた噺以外の賣物でお茶を濁して引込む人達を仲間で片輪者と呼んでゐた時代に、至つて手堅い現状維持派の桂派で最も權威があつたのには吾々も不思議に感じて居りました。

